

少雪でナガイモ凍害

2019年3月27日

冬の少雪で土壌凍結が平年以上に進み、春に収穫するナガイモへの影響が心配されている。帯広市内では、イモの本体にまで凍結が進み腐敗する被害が発生、商品価値の低下や収量減は避けられない状況だ。管内は青森と並ぶ大産地で、農業関係者は「打撃は大きいのでは」とみている。

◆収穫遅れ、収量減も懸念

ナガイモは秋に一定量を収穫し、残りは地中でひと冬寝かし、雪解け後の春に掘り出している。例年なら畑を覆う積雪が「保温材」の役割を果たし、土壌の凍結が進むことは少ない。ただ今季は極端に雪が少なく、畑が冷気にさらされた。

帯広市基松町で1ヘクタール分を春に収穫する予定の小泉裕亮さん（44）は、「こんなに雪がないのは初めて」と話す。イモは地中の数センチ～1メートルほどの所に埋まっているが、「イモの3分の1から半分程度は凍結しているのではないかと心配する。

管内8JAとともに「十勝川西長いも」を生産するJA帯広かわにしは、2月と3月に凍結深度調査を実施。地上から50センチ以上凍っていた畑が見つかり、イモも一部で腐っていた。同JAは「平成に入ってここまで凍結したことはない。被害の大きい所は2、3割の収量減になるかもしれない」とする。

収穫は4月から始まるが、凍結の程度や収穫方法によっては作業開始が遅れる農家も。畑で腐った部分をカッ

トして出荷することになり、収穫効率の悪化も予想されている。

小泉さんは「腐敗が広がらないよう早く収穫したいが、凍結が抜けるまで掘れない。ナガイモ収穫後に予定している他の作物の作付けも遅れる。不安だが、自然相手なのでどうしようもない」とこぼしている。



土壌凍結が進んだナガイモの畑を見つめる小泉さん

畑カラカラ雨不足 風害、生育鈍り不安

2019年5月23日

十勝では4月以降、極端な雨不足の状態となり、農家が頭を抱えている。畑の乾燥が進み、風が吹くと芽が出始めたばかりの作物が表土と一緒に飛ばされる心配も出ている。25日からは最高気温が30度以上になる見込みで、土壌に蓄えられた水分もいよいよなくなり、生育の鈍りが深刻になると不安視されている。

帯広測候所によると帯広の平年の降水量は4月が58.9ミリ、5月は81ミリ。これに対し今年4月は平年の半分以下の26.5ミリ、5月（22日現在）に至っては11.5ミリしか降っていない。

21日にはまとまった雨が予報され農家も期待したが、降ったのは広尾、陸別、浦幌など一部。中央部はほとんど降らなかった。

音更町の柴田直人さん（49）は、畑がカラカラに乾いて表土が飛びやすくなっていることに悩む。乾燥を見越して大豆は通常より深めに種をまいたが、20、21日の強風で2センチほど土を持っていかれた。雨がないうち風が吹けば、深さ3センチ程度に植えた種までも吹き飛ばされる恐れがある。

26日には帯広で最高気温が34度と予想されており、柴田さんは高温で風が吹きやすくなると懸念。「効果は薄いですがスプレーヤーで水をまくことも考えないといけない」と話す。

生育への心配も募る。芽室町の坂東隆幸さん（60）は「水不足でビートが大きく



カラカラに乾いた大豆畑を見つめる柴田さん（音更町内）